
MEMORY

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MEMORY

【Nコード】

N3854Z

【作者名】

時雨

【あらすじ】

双子の兄弟が旅立つ日、千年の歯車が回り始める。

想いと絆、そして記憶。

妖精と人、想いと記憶の物語。

はじまり（前書き）

le souvenirと言うサイトにて趣味にて現在絶賛連載中
！こちらには完全版として更新していきます。

はじまり

今思えば、私は目を覚ましました。

瞳を開けて、閉じて……。瞬きをしても其処は、ただただ無限に続く闇でした。そしてただただ永遠に時は過ぎてゆきました。

何も見えませんでした。何でみるのかもわかりません。ですが不思議な事に私には感情がありました。

そこはただただ無情に時間だけが過ぎて行くだけで、ただただ退屈な毎日でした。いいえ、日なんてありませんでした。

私が最初の物体だったから。

今思えば、其処はきつと闇の中の闇だったのでしょうか。誰もがいた場所だったのでしょうか。

ですがきつと、誰もわからなかったのでしょうか。目を覚まさないったのでしょうか。ある日私は眩い光を見ました。綺麗で眩しくて、キラキラしていてとても心地よかったです。

私は気付きました。その温かな光を発していたのは私だった事を。私は嬉しさのあまりに歓喜の歌を歌いました。

そうです、私には口があったのです。

すると風が吹き、あまりの突風に視線がぐらりと揺れました。ですが次の瞬間には、私には不思議な安定感が在りました。

そうなのです私には足が在りました。二本の足で、私はしっかりと立っていました。

私の足元には、豊かな緑がゆらゆらと靡いていたのです。

靡かせていたのは、風とゆう者でした。

心地が良くて、私はその緑に倒れました。耳を澄ませれば「生

きている」

と言っていました。

答えた者は、土とゆう者でした。

その時にまた気づいた事がありました。私には耳があったのです。その者達の声が聞こえるのです。

その嬉しさに私は目から水を流しました。頬を伝い、その水が地面に落ちると、その場所から水が噴き出すように湧き出したのです。すると声が聞こえました。「ありがとう」と。

その者の名前は水とゆう者でした。

私はその言葉に嬉しさを感じ、胸がほんのりと暖かくなりました。その不思議さに私は自分の胸の辺りを触ってはみたものの、直接は暖かさがわかりませんでした。

その時に分かりました。私には2つの手がありました。自分の視線より高く手を上げてみると、ふわりと確かにその手に暖かさを感じて弾けたのです。

すると私の両側に焰がゆらりとそしてゆっくりゆっくり息をしたんです。するとふわりと心地好い風が吹きました。

「そして気づいたのです」

「私は全てだって事。この世界は記憶と心で出来ている事…、それを彼に教える事ができたのであれば、あんな事にはならなかったんです」

「全ては私と彼の思いと記憶の違いだったのです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3854z/>

MEMORY

2011年12月13日00時57分発行